

不登校児の母親の変容過程に関する事例研究

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

現在、不登校の子どもの数は年々増加の一途を辿っている。不登校児に関する研究だけでなく、1980年代から家族に関する研究も数多くなされるようになった。中でも、親の変容過程を独立して取り上げるようになったのは、1980年代後半から1990年代にかけてのことである。板橋(2000)は、親の変容過程に関する先行研究の共通点を見出し、5段階に設定した仮説をたて、質問紙調査、面接調査、グループの観察の結果から検証を行った。その結果、第1段階：苦悩・困惑の段階、第2段階：操作的期待の段階、第3段階：行き詰まりの段階、第4段階：本人を尊重し、任せられる段階、第5段階：親自身の成長の段階という5段階仮説の妥当性が示された。また、それぞれの段階における変容を援助する方法も述べられている。

本研究においては、「親の会」に所属する母親10名を対象とした聞き取り調査を行い、母親が子どもの不登校に直面した際、どのように悩み、子どもを受容し、どのように母親自身が成長していくのか、そのような自分の変化をどう捉えているのかを分析していきたい。その際、板橋(2000)の5段階の変容過程段階を用い、各段階の特徴や意義、および第5段階へ到達する過程を検証するとともに、子どもの不登校が母親にとってどのような意味を持つのか考察することを本論の目的とした。

調査対象は、「親の会」に参加している10名の母親であった(母親の年齢：38～60歳、不登校を経験した子どもの年齢：13～27歳)。調査内容は、家族構成および原家族構成、母親の生育歴と生活歴、子どもの不登校の経過とその時々母親の気持ち、さらに幾つかの質問項目から構成された。

10事例の中から4事例を取り上げ考察を行った結果、事例1、2、3においては、子どもの不登校に直面し様々な苦悩を経験した結果、「自分を好きになりたい」、「自分が自立して生きていかねば」、「自分が自分であっていい」と思えるようになったと述べていることから、母親が自分と向き合い、自らを受容していこうとしている姿勢が伺われた。事例4においては、結婚後、自分の気持ちを押し殺して義父の顔色ばかり見ていた母親が、子どもが不登校になり、義父と衝突する様子を見て「自分の心」を解放させ、自分の道を歩くようになっていく様子が伺えた。以上のことから、子どもの不登校が母親の人生のターニング・ポイントになっていること、その変容にはカウンセラーや「親の会」の支援が大きく作用していることが考えられた。さらに、変容過程に関する5段階の仮説が、不登校だけでなく、様々な問題を抱える人々を支援する指標の一つになる可能性が示唆された。